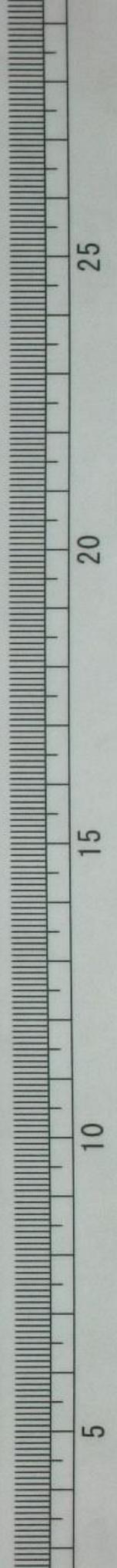




唐  
日本歳時記  
春

日本歳時記  
春

713  
721  
1



13  
721  
1

日本書紀卷之四

一 此編をわらむにせしむらうの處よりこれ  
冬らくはまゝとて平三百六十旬に乃の  
亥雜事とて後く一乃文よおをるくとて我  
國に又まよわつるも又家國の事とて是  
る一ふけりよとていひて書はむきゆりせ  
いりり乞とて後くふさんとてよわわらず  
まらうの事とておまら後裔のこ  
の民國に後く男族の女に業時れ事  
宣とてまらぬたぬよとてまらぬの

113  
721  
1-4

日本書紀卷之四

大正十三年二月  
東京大学文学部  
蔵書

一 案附の意を履かすの方へは徳書成  
 考へ乞と何事物と辨くまじゆ終に辨て  
 此中の方こそ方とそ行て決まひ好かしく  
 世候れ意ともむり人ときなり  
 一 月く乃南官を民皇日用へ候所りた  
 書込のひり取存紙わりも侍れとましく  
 これと志致さばうづらりてにたれし  
 此へ一 家面ありこけい居りたき  
 本邦の民候よかれり有よたき藤原の  
 事のみとそりてくる一 侍り也

一 案附の意を履かすの方へは徳書成  
 考へ乞と何事物と辨くまじゆ終に辨て  
 此中の方こそ方とそ行て決まひ好かしく  
 世候れ意ともむり人ときなり  
 一 月く乃南官を民皇日用へ候所りた  
 書込のひり取存紙わりも侍れとましく  
 これと志致さばうづらりてにたれし  
 此へ一 家面ありこけい居りたき  
 本邦の民候よかれり有よたき藤原の  
 事のみとそりてくる一 侍り也













乳終く喜登と云じ

和國乃風俗之變ふ小松竹藪等々之作  
てす之類極遠深海蝦夷人等之類初  
米標を以てはるる類之れとすじ類初  
來り雲霧之と氣とと心是と等葉と  
蓬葉ハ他名を以てはるる類之れとす  
りるこ一はも葉解生葉本ありと類之れ  
類登く名を以てはるるあり一に四葉  
後之れとすりはるる一は又葉の類も  
喜登細生葉と云はるる類之れとす  
又西上楚人五年登と云る事と云る事

やりの事と云るやゆし

食時よ及く類登と祖考考妣の墓前より  
酒と献ずる事をも仕度乃人ハ今日祭禮  
あり仕度乃人をも祭禮ありといふ由か  
祭禮の事と云はるる事なり  
乃も之可なり楊氏後を除自乃あこ  
と初ひ一す一之の家流の流より  
之の祖考考妣の墓前より祭禮と云る事  
之れ一はるる事なり  
類登と食一居種ゆと作と飲一酒と



房種を孫思邈の房代名とするをせり我  
 祖子と居種は教とすむらるるを漢書  
 の沛寧弘仁年中よりせりやあ  
 元日よの居種教と稱ひ二日よの教と  
 二日よの教は教を指し又幼少の  
 衆とゆれば是より居種と名を  
 歳を失えは後漢の孝廉杜密は  
 幼少の書よりえり後漢の孝廉杜密は  
 わりておれり之教の中は幼少の  
 幼少の起これと云くは漢代に  
 ありを破り待し不稱最後は居種と作  
 又成文の衆は其の好気能論失  
 居種は其の好気能論失  
 種は少年の衣なりと云くは  
 盧柳の後を西に居種酒との  
 早幼よりと云くは幼少の  
 月元日一衆の始あり幼少の  
 世すんばあるは其の始あり幼少の  
 長と云くは幼少の始あり幼少の

梅桑歲時記卷一

物々えけり

○今朝夜よまじりさう何乞人さもたつと来と来  
三層屋の画像をかねて紙に刻て紙よりたり  
と折じて入り門戸とに取く乞と賣り福祿  
をゆりさく冥者多し教訓よりよとりのる也

○しつ約恙水さくのびるあり 東後回春よのんく  
おんやまおのりより十二月の土用おあま水  
月御生動の方の井と封じて人よ海せすさまの  
日代お上よ土瓶小入く女あよつきくまはるるあり  
ままの月美水と飲る年中乃移守と守く  
かゆ事んとすあひしてわさくしをひる井紀水と  
てくさくありあとのむらもゆりてやまおん  
免よくあま水といふ事なり

○又菫園といひてしらるるむらむらむら  
あま渡屋と稱す梅すはるる天の射野文全考之十七條の字下  
乃御のよのく麦萩杉御成形ゆ港へ竹垣心機蓋始干  
戦國これとてさくさくはるるあり他人を菫とて  
修解の凱鏡代形ゆゆり月さくあり  
命とさくさくあま菫といふ文意とよむるのむらむら也  
菫園はむらむらむらむらむらむらありさくさく二月の  
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら



○今日地仁湯と振すまの百邪と辟と薬酒に  
 みるより椒を粉香とさる竹わく又月令慶賀  
 元日蒸赤湯と服し薬を用く沐浴一飲の  
 新て焚之極と却邪と辟疾とたまはるる  
 後室の月令元日梅酒酒と振すまの節と印  
 白と赤の月令慶賀小く元日飲酒皆  
 日後新又辟邪といふ慶賀節の正辟酒  
 酒新年命書に記す

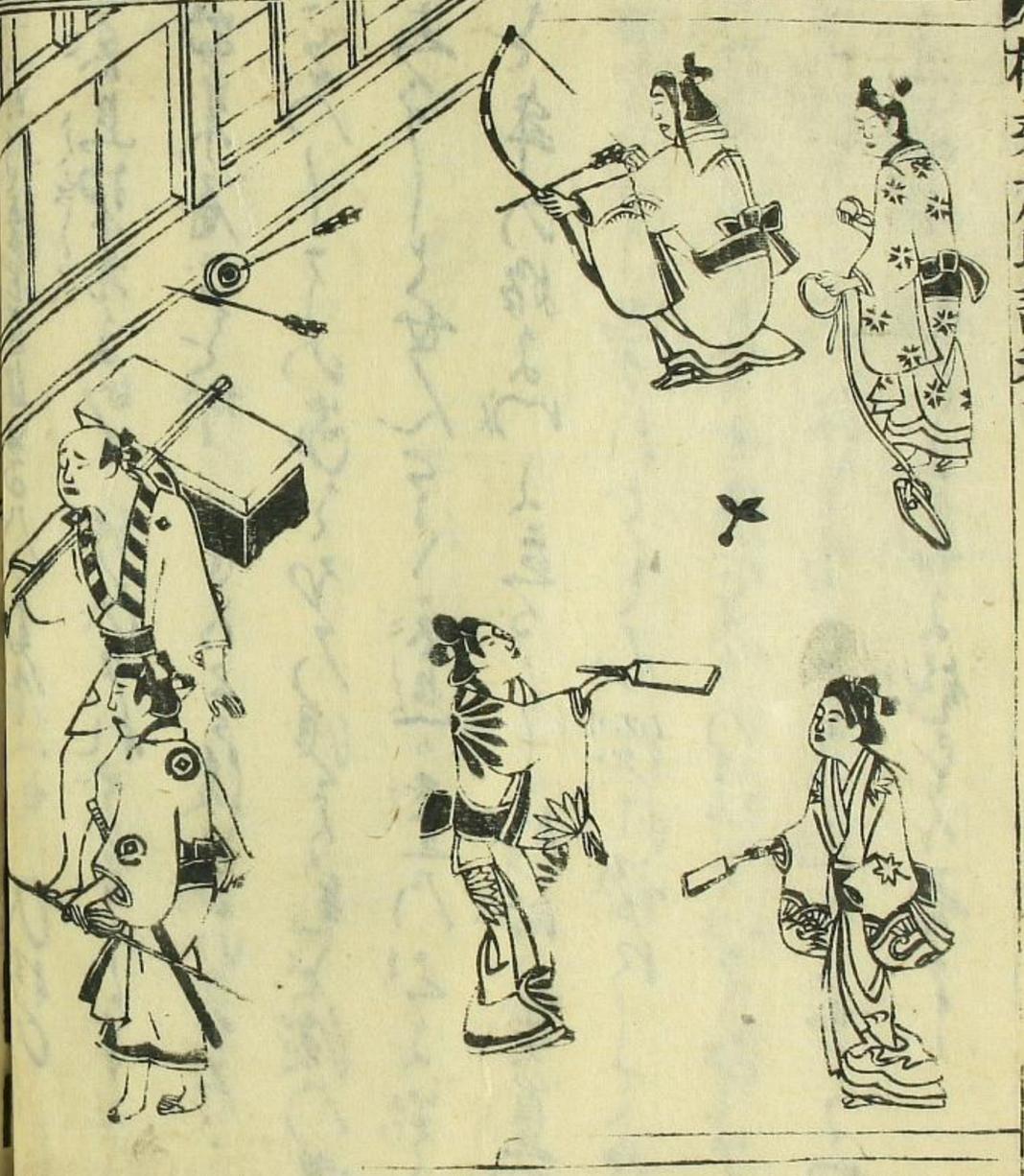
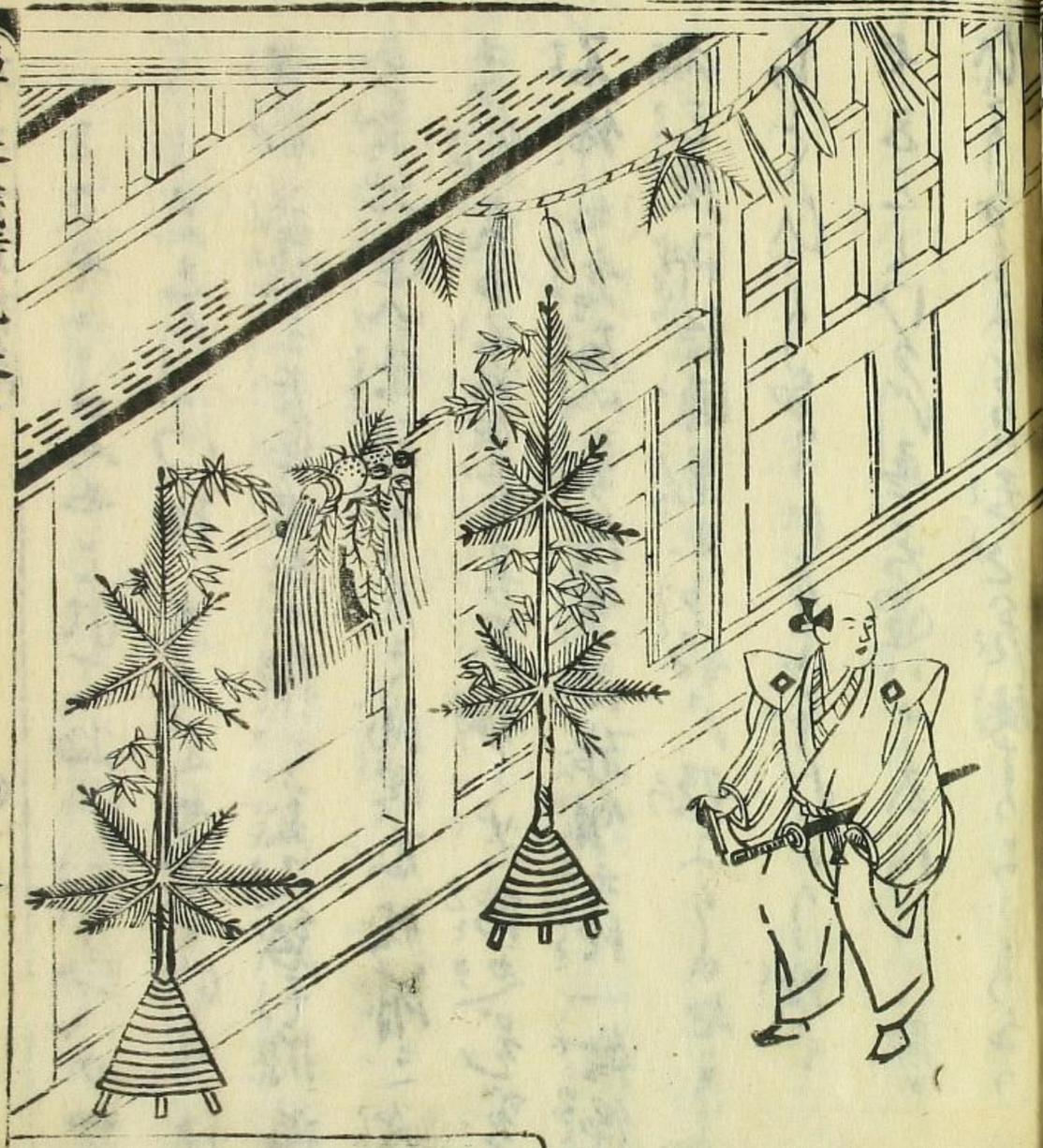
○この日この日と見すましくつぎの松竹とまはるる  
 とらるるの上は豊の地つる葉慶あつてか  
 事あり世後回さるるのけり  
 海にきくく一様りあはるる封戸あるふ  
 民がとるゆれとじう一町のうらとぬ  
 ばよまらるるのとすて一六のうら  
 ありその中の様りあはるるつるは  
 つまらわく様その門乃あま松竹とま  
 中とせとらるる竹いよあつては  
 る年の始の終るまよとてゆり  
 又雪のゆり  
 里のゆり  
 れい志を纏ふかぎりてゆれ  
 ちゆり

横濱新聞前巻

二



博覧古今事類考



博覧古今事類考

卷一





一年ハ天運と斥河の風と云、知りたるは理也  
 これ姑妄よしらう、後すへくは春より夏は律は次  
 ○そん、うし、み、今日、桃符と改換する事あり、桃  
 符ハ桃木と云、此と云、うし、うし、うし、うし、  
 戸は掃、うし、れと、年の始と云、換、春、は、桃、把、  
 桃、換、春、符、と、玉、雜、符、符、を、使、い、り、改、換、す、  
 うし、海、中、の、爵、墨、心、あり、うし、桃、木、あり、桃、下、に  
 二、符、を、うし、百、鬼、と、呼、ぶ、家、小、分、元、日、桃、符、と、使、  
 うし、あ、ん、ん、風、信、通、ゆ、を、い、り、を、雜、し、り、は、桃、符、と、  
 果、あり、ま、あ、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、  
 うし、の、桃、符、と、云、うし、桃、符、と、云、うし、桃、符、と、  
 みるの精止、仙木あり、味辛、氣、熱、無、毒、うし、うし、  
 厭、俗、す、と、あり、乞、と、云、うし、うし、桃、符、と、云、うし、  
 邪、氣、と、云、うし、うし、うし、うし、うし、我、國、も、桃、符、と  
 うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、  
 後、す、黄、泉、平、好、より、桃、樹、小、立、うし、うし、の、桃、符、  
 うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、  
 軍、時、逃、還、始、乞、桃、を、用、く、鬼、と、あ、せ、く、絶、介、り  
 うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、うし、  
 家、國、も、桃、符、と、かく、へ、うし、事、も、や、朱、文、云、書、不

本草綱目卷之十一

十一



あやふあきくまのふねをいれん乃らるよ  
も家のふふく一那 玉座首まよ由海関白  
昨のまきくまのそく一後人のまきくまの  
まのけいふまよまよまき

元結の米且乃得り

一日今年始一奉 兼制元兼深百の交の趣  
興一年同

王刑公の元日の後又

燧作勢中一兼深ま風は入居福千の万戸  
種くまの依把新世換書存

宋崇之の歳且れり

居間無雙客早起但如常 挑板入換梅花漏  
兼香甚風回笑語平氣卜豊穰柏酒何骨熟  
心康寿自長

○兼小程使と兼一 越定つづけと兼あつた  
今日より一歩一 禮服と兼まき初と兼一  
まのふく一一年乃金物と兼ひんとまき一日之  
かくるく次

○世信ま今日終日屋中と掃塗せす毛新  
春の湯室ままきまきまきまきまきまき





ひも多うして園ありやと林らうたわらふ  
かたされどもその勢勢すへく燃よいさるまて  
なくしやまは杜徳も又多うしてあつさう  
あぐーは地動乃かたれらなる勢へく

○年八始は新子の破魔弓とく射るハ活  
世をも我と忘れざるさあうへく世むし一冬  
猶礼とて正月は内義あうら射る事乃たり  
しあり孝徳天皇は御宇は内りて正月は  
らとさうむし一冬古さく文も又えり  
かほるとはよらむし一冬六年乃たり

年也せり人をらと射たり一冬は文執通考

日本乃新也毎正月一日必射致す記き

○又球杖うらうりあり是世むし眼とらり

とら後にはたき事の致致あう侍る心

新照御中抄十云十管派黄帝取置心取

球之今球杖是也以被例淨壬午始用件

國中世凶事御日本國學其例年始打

球杖云云は事たりなりす且古き文也

見え次附會の徳あるへく

○又あつれは女乃わらふれあだのこらひて楽

善子よねとつまぐ板とけくろりあり世後四答  
 おどくは地たれさるもの蚊よつれぬまじ  
 ちひさるり秋乃らくめ不境障とて虫おそ  
 ての蚊とらまふおまへあはれのことよの樂華  
 子をどととんだらめしつてねとつけたり  
 これと板いづつあはれまはる内とんとつて  
 ちれせしめははと蚊とおとつてつらぬめ  
 いまのこととけきゆるかり  
 ○又よ新葉集との事正月はあつじり一巻  
 正月はあつじりはあつじり縮歌とて葉中の

せんごの蚊と念う  
 ちまあつじりちり

果女をうらむとつてて内親みく秋夜とてひ  
 てまらせしむるなり  

 中葉のとき乃代正月十日  
 ちまあつじり縮歌とて葉中
 
 持統天皇の治時に漢人縮歌と奏せし  
 ころや史原氏乃拙治れかゝるのうらまひあり  
 ち海もかたあつては事ろくくい海風をほろ  
 ちあよとまらつて子新葉集乃秋夜とてひ  
 侍りたり臨舞乃舞人善春集と奏せしあり  
 一葉集とくと縮ひまひ  

 世後四答  
 ちまあつじり
 
 今をちま  
 ちあよ乃始よ新葉集とて史原とてとて  
 てしとて舞ありくありあまらつてしめあり



二日は日と狗日とくらくち方銀は書よ二月一日  
 と雜し一二月と狗と一三日と猪と一四日と牛  
 と一又日と牛と一五日と猪と一六日と金と一  
 八日と穀とすこの日噓の時を生むるもの  
 所久くしつ時ハ怒りうとあんなれをもて此乃  
 生他日終ハ妙理ありかり新言といひて天  
 乃大なる運を推するハ象と云一海とくくあま  
 然る儂まわち小島あり幸ありすわ杜美  
 くの元日五人日来る不法時といかり信  
 とかりと怒乃何方授礼して人物たよ  
 事せしはるるなり

○今朝卯乃新よ起念時よりて雜養と云  
 吟のとのむと暇乃と一又温飯と念  
 温飯は乃むべ一このお新ま乃髪よりけり  
 所あり今日明日行く事す一  
 ○今日戌家と馬並初ありこれと初と馬  
 又この初とあり又弓射初鉄砲打初あり農家  
 此とと初あり高家とありひ初と一舟  
 一舟初とあり  
 ○世俗よと年朝よ鳥一男よは水とかり

あつたは永祿の法阿波の三好の宗隆松永遠の  
 う姫女と我女乃の寵厚よ妻あてせしり出獄  
 と所初しとるや年つる紫血氣の盡るるよ  
 まうせくいたたぬをとなす一男とそこるい病  
 と時一をさ只御關軍よ及ふり何う後中を  
 酒食と客をせ御飽して乳よ及ふり乳れ紫  
 気考のりや一寺殿とを述うす又見し  
 これと夢のへー

三日今約飲食とらるる又昨日のさし一昨日よ  
 のむ如擇を又あつり

五日采地あつた人さいは領内り農人多く成り  
 必極饑飢肉と与ふへ一年の初れ客を家  
 あり分よ酒と美饌と与ふへ一農はも里民の  
 中なりこれ稼穡の功ふりて身とや  
 たわ事なれい早賤とるこそくたろふすへ  
 には是采地とたるの事と候し此を年れ  
 農功不むくゆとるり又道路よ旅人多  
 を大年り急をりといふもとる

六日沐浴

博桑庵甲言卷一











杉皮まつしき葺き置る人をもとめおかしき  
まこととの因へりへくまをわすれり取り  
てその折ある米飯をいへるのふりかせ  
おかしき人なりてゆきとおかしきま  
乞ふけしき人のいへるありは國さ  
くまの國さく日落きしゆは  
ゆらとありまききききと  
くめんともや東國さく事  
くまの事ゆきまきききき  
礼義よきまききききき

梅すくまもろくし中元日よ後と  
けく葺き置るよま扱きき  
しつしつりの風俗ありと  
又新楚記よしき今  
掃造令人執杖打糞堆云  
おかしき事耳これとい  
まおかしき事あり  
十五日今日と上元と  
松屋連繩等とゆきまきき

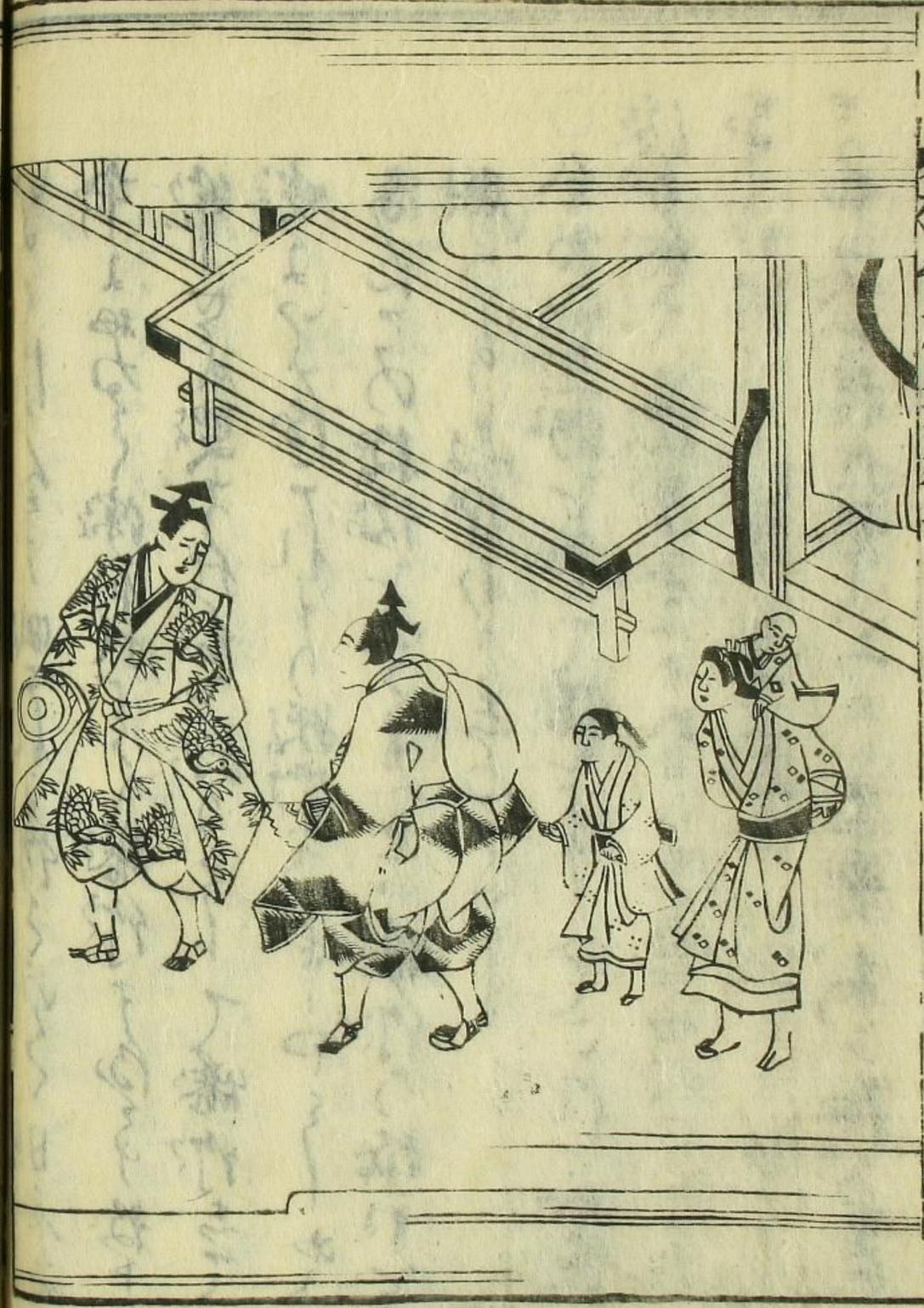
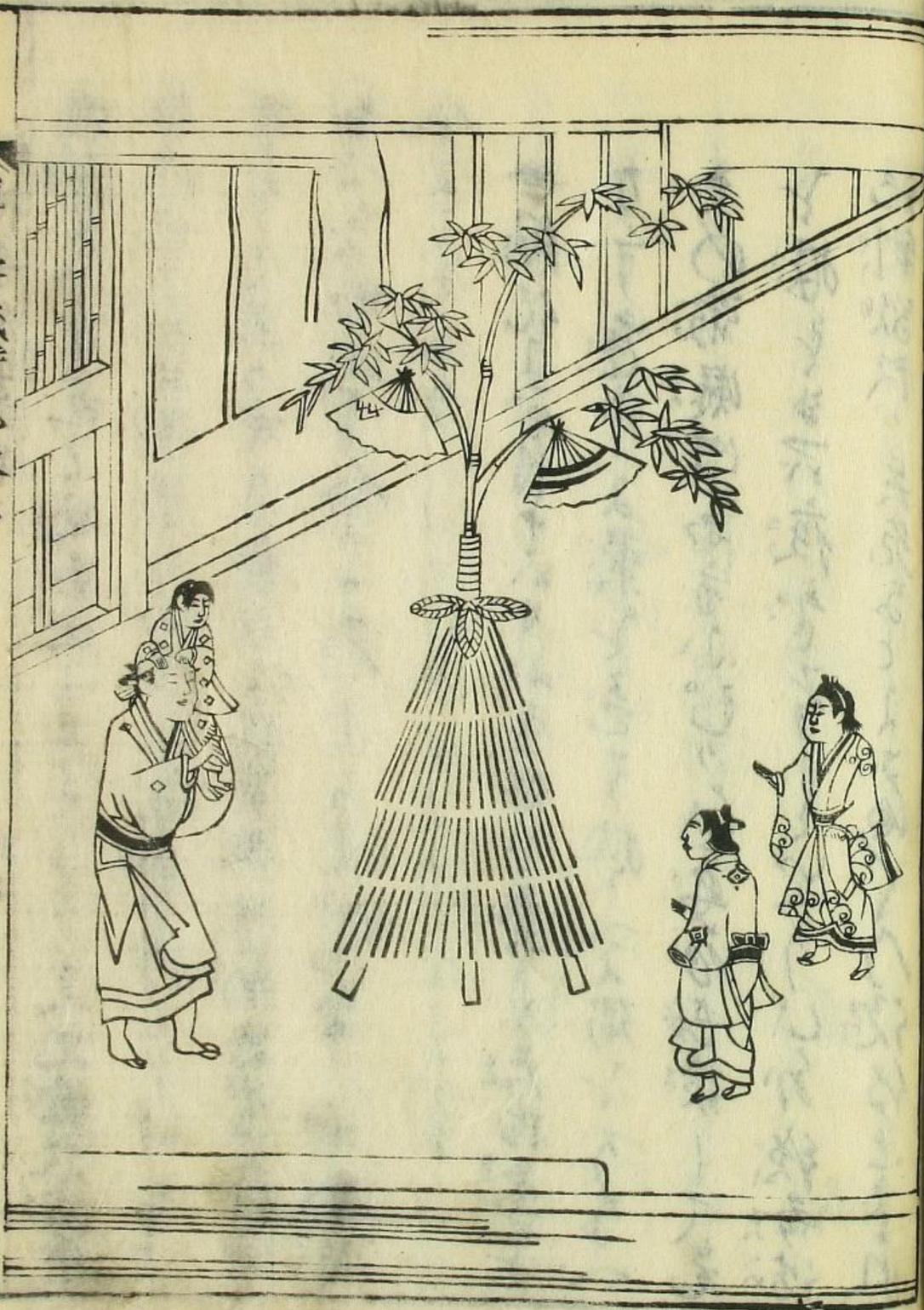






かめくすいん乃く先子孫小憐息とるあふ  
くれくせされは毒食老く為所汚濁人  
ありく爆杖と教とるれ所依乃樹と賃気  
しん途よ級とや世朱子乃くは他相死  
氣未教被爆杖發教了又焦氏智業よ家吹  
後決某と引していよく爆作妖氣と降車位死  
はく鄰人よ仲雙といふものありて鬼乃くあよ  
崇とたされては痛と用くうあさつじ之鬼  
志はりよ瓦石と投く妨とが決雙巫理と  
救くこれといのりなれば初く妖業とふはく

中よお力を激ねれく爆作すあき教子  
半よ變るはちと放りて爆作して  
呪よつたこれより妖業乃車やし  
あこのの教後といふく又まは爆作乃抑事と  
勝くこの事理あり志あり  
○今初小豆粥と煮て飯とまてこれと今原  
漢の細き枕まよふ十日かりらつたれせくま  
ふしかけしをい半なる宛車のはより初り  
とる又七粒丸強といふは未粟黍子穉ま草



胡麻子小豆也と述<sup>マ</sup>武<sup>マ</sup>乃<sup>マ</sup>又<sup>マ</sup>九<sup>マ</sup>條<sup>マ</sup>右<sup>マ</sup>也  
 此<sup>マ</sup>記<sup>マ</sup>乃<sup>マ</sup>白<sup>マ</sup>穀<sup>マ</sup>すめあつ<sup>マ</sup>に粟<sup>マ</sup>粟<sup>マ</sup>柿<sup>マ</sup>さけ<sup>マ</sup>を  
 方<sup>マ</sup>りし<sup>マ</sup>志<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>又<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>上<sup>マ</sup>地<sup>マ</sup>黄<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>防<sup>マ</sup>風<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>素<sup>マ</sup>粉<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>  
 等<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>人<sup>マ</sup>よ<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>少<sup>マ</sup>年<sup>マ</sup> 中<sup>マ</sup>全<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>  
 今<sup>マ</sup>よ<sup>マ</sup>こ<sup>マ</sup>え<sup>マ</sup>たり

世<sup>マ</sup>風<sup>マ</sup>記<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>十<sup>マ</sup>日<sup>マ</sup>小<sup>マ</sup>豆<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>煮<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>天<sup>マ</sup>物<sup>マ</sup>等<sup>マ</sup>と  
 乃<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>庭<sup>マ</sup>中<sup>マ</sup>又<sup>マ</sup>粟<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>煮<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>於<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>  
 その粥<sup>マ</sup>凝<sup>マ</sup>時<sup>マ</sup>亦<sup>マ</sup>方<sup>マ</sup>小<sup>マ</sup>じ<sup>マ</sup>ひ<sup>マ</sup>再<sup>マ</sup>煮<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>乞<sup>マ</sup>  
 と<sup>マ</sup>母<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>母<sup>マ</sup>不<sup>マ</sup>夜<sup>マ</sup>等<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>外<sup>マ</sup>候<sup>マ</sup>者<sup>マ</sup>皆<sup>マ</sup>  
 記<sup>マ</sup>別<sup>マ</sup>叙<sup>マ</sup>叔<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>美<sup>マ</sup>苑<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>よ<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>海<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>記<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>是<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>れ

一<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>十<sup>マ</sup>日<sup>マ</sup>膏<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ば<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>日<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>煮<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>  
 と<sup>マ</sup>志<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>又<sup>マ</sup>劑<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>菜<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>記<sup>マ</sup>も<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>十<sup>マ</sup>日<sup>マ</sup>小<sup>マ</sup>豆<sup>マ</sup>  
 糜<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>け<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>て<sup>マ</sup>油<sup>マ</sup>膏<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>日<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>  
 中<sup>マ</sup>つ<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ん<sup>マ</sup>え<sup>マ</sup>り<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>令<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>煮<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>  
 亦<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>は<sup>マ</sup>色<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>ん<sup>マ</sup>授<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>煮<sup>マ</sup>  
 ○今日<sup>マ</sup>祖<sup>マ</sup>考<sup>マ</sup>妣<sup>マ</sup>乃<sup>マ</sup>盡<sup>マ</sup>而<sup>マ</sup>祭<sup>マ</sup>酒<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>新<sup>マ</sup>果<sup>マ</sup>  
 と<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>む<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>令<sup>マ</sup>ふ<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>日<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>煮<sup>マ</sup>粥<sup>マ</sup>  
 と<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>子<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>書<sup>マ</sup>文<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>記<sup>マ</sup>す<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>ら<sup>マ</sup>  
 ○枕<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>あ<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>と<sup>マ</sup>く<sup>マ</sup>一<sup>マ</sup>日<sup>マ</sup>お<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>ぬ<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>本<sup>マ</sup>を<sup>マ</sup>記<sup>マ</sup>か<sup>マ</sup>して





とく主人は一日の晦とて家より出ず父母兄弟  
親戚を福す

按て家より出ず親戚を福すは家内之志の  
善しと禁ずる事と國の政あり晦正月十  
五日朔より初後者一日禁とゆるらるこれ  
と放夜といふゆるむじの國おしかり  
事ゆるりと見えたり

廿日今日女人乃鏡者之禮とてさしけりし  
鏡鑑と考念ふ事ありこれ或は鏡の鑑と  
いふとひびく事ありけりともしるゆゑ  
けりといふや初後者之禮とてさしけりし  
と縁よとさるる一信よといふるの事

晦日沐浴

○凡祭也人功さるる事ハ晦日・家内室中  
とましくを掃除するりゆゑありこれハ毎月  
晦日に家内室中ありあり掃除せぬれど  
正月月中掃除をゆるたすして人功とらざる  
これハ一ハ掃除者あり一ハ毎月晦日ハ  
乃仕下として文中と掃除せしむる  
也表式小見しなり





苗列御中史高書命朔回新地恒會喜花撰

玉江春酒香

上りれども親戚しくな司人越ハ子兄弟を分  
水も親密なるをさぐる取捨の便と

六月元日... 世信小歳徳林や

都り幸祈り厚林門答元元治酒入ると用係

徳之あやうーと久あ小歳徳の方ハ一年の

万玉使乃方より若十干乃使をり但十干此

則又と海徳... 甲酉戌庚壬これより又と治

徳とれし下己辛癸こも有り甲の歳徳を東

言甲乃方に是酒の歳徳を南又酒乃方よ

在戌の歳徳を中又戌乃方よあり庚の歳徳

を西又庚乃方よあり壬の歳徳ハ水又壬乃

方よあり己又干此歳徳ハ湯徳ハ水あり

を方いあり又乙乃歳徳を西又庚の方よ在

丁乃歳徳ハ水又壬乃方よあり己此歳徳ハ東

又甲の方よ祈り辛の歳徳を南又酉の方よ

祈り癸此歳徳を中又戌乃方よあり乙丁己辛

癸を陰干とす有又おのづか徳を湯干

又配合して徳となすこもく己と甲の妻



日月の多しとるるありては、（一）又月礼大なる物  
 以て祭事紀日月星辰を祭事とす。祭日於壇祭月於  
 坎。楊氏云、春分朝日、秋分夕月、此祭日月之正  
 終也。賈誼傳傳云、二代之礼天子喜朝朝日、（二）  
 暮夕月、鄭氏云、祭日也。壇祭月也。壇、顏氏云、朝  
 日、以朝夕月、暮夕迎喜初出也。（三）  
 これら天の日月の事、祭事とす。一、  
 朝日人皇五十二代、漢委天宮、神代天皇志神の  
 以て、祭事とす。神代天皇の祀、春日大明神より二十代  
 代乃孫智流丸く、社祭の執命ありて、玉璽の

事、いふ事、古く魚味とるる、神代天皇の祀、  
 とかき、一、此神より日待月待の事、（一）  
 一、今乃世俗士庶人より、（二）  
 一、今乃世俗士庶人より、（三）  
 一、今乃世俗士庶人より、（四）  
 一、今乃世俗士庶人より、（五）  
 一、今乃世俗士庶人より、（六）  
 一、今乃世俗士庶人より、（七）  
 一、今乃世俗士庶人より、（八）  
 一、今乃世俗士庶人より、（九）  
 一、今乃世俗士庶人より、（十）

とんや日月と微賤乃あまをふとや此終の委  
とめ日月をあふぐりかろ一め後とあんと  
あや神を此終とてけ終はあんと終とてあ  
わんや王制は天の言地とすつり法信の社授  
とありたまはみ祀とあつとてり此のり一是  
士と子祀とて意意人の一祀とてこれ祀の中ふ  
て二祀とありあの一祀とあつとて一又此祀  
小見とて上いりてかぬあつ事とて中下とて  
と憐する事とてあつとてあつとてあつとて  
天能日月といあつとて一此史を地日能いあれ

あつとてあつとてあれらるるいあつとてあつとて  
久しといふもなんそらやなりとてあつとてあつと  
唐又神道家の終とい日終とい天能と神と  
あひらあり月終とい月終といとあひらありとてり  
三皇若神の日の終月終とい月乃神とあつとてあつ  
とりありとて一此邦の法とてあつとてあつとてあつ  
あ女んとあつとてあつとてあつとてあつとてあつと  
起く神道とてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと  
とて一一日終あつとてあつとてあつとてあつとてあつと  
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと





新嘉坡の三戸ありびこさび庚申とちんがこ  
 戸休す又大年廣紀よしく勤まこ尻れ  
 帯よ人男乃申おわきも飛とうさひ  
 一庚申の日よ新うこに上希よ修  
 他とまのぶまのまけ之尻と綴ぐーか  
 なるまをいんら雅似ゆべーたと感  
 しくとる乃神とましく人乃た  
 人の善趣こよく考とく庚申乃  
 二此此界のわまのわれ天曹乃  
 人ましく乃がたの懸事と知修ひ  
 小はぐるれ人乃あまらたなれハ  
 十二年乃勢命とうびひ少き  
 乃命とうぶあよあまよと神  
 てこれをさげとありか  
 んる修す乃またくし  
 何り積不善乃家小ハ  
 小く此此の理まう  
 庚申の積修す  
 まぬい  
 杉の

小はぐるれ人乃あまらたなれハ  
 十二年乃勢命とうびひ少き  
 乃命とうぶあよあまよと神  
 てこれをさげとありか  
 んる修す乃またくし  
 何り積不善乃家小ハ  
 小く此此の理まう  
 庚申の積修す  
 まぬい  
 杉の





許郭別り得て初共守庚申と云ふに  
と一息籍り周岳代傳し唯茲推甲子不修  
也庚申と云ふなり

世傳西又九月と云ふ二月と拘忌奉らるるが  
中義ふもゆかれどくあるか入るり又籍録  
正又九月と云ふ廟より業は是なり信波能志  
小とく佛法は此二月を齋素月不宣事籍  
是破信入今京師官命下別任知不云此月  
而差決之少外友也不修之悲ら初敗之何  
思之甚也とり又御代群傳と云ふ西人

九月石上友戴地りつとく親氏乃多備よ天皇  
親を後と云ふは大神別と云ふは毎月一とび  
轉して人乃善也と云ふは此二月南瞻部別と  
てく此唐人それと云ふは刑と云ふは子日二長  
月並徳因と云ふ唐事と云ふは石上友流世因  
之と云ふは此と云ふは金ハ唐氏乃次よりて  
傷家代能いあされし毛也と云ふは唐すくよ及つは世人  
多すすげ拘忌よちのまはりて可あり  
そろく一母は正月は後世の像と云ふは鬼と云ふ  
七月今唐義にんえり我國もも籍世の身

世小久し一色紙傳えおそく作り作りも経るとつた  
 色紙守り志何りけさへ磨遠史はふ紙代磨  
 年中、経進とよその科筆小進せしり及新  
 せざり事と和く清く解てあすも世これと何  
 くれと御帯を袖りて舞くせぬぬ明を  
 或年の四月元日の夜此巻よひくく小鬼  
 くの虚耗と物して玉苗とぬとむ何よ一た鬼本  
 て小鬼とそくしてこれと何よ明を愛りくら  
 こまぐらくと何はくハ物くPく屋を経中  
 純を経進をりりり色紙をけ何帯乃舞と

解くも紙代磨の世世と新せんがぬよ舞て五下  
 耗乃巻と清くとりと法ひて身よく女とこれら  
 若くは命一う代徳と圖してこれとた下  
 けくくらまうとあんなさるのねりりか  
 去るまうと経進張紙謝物経進表あまハ冊元  
 ぐりお流よび事何の久し一揃とる小経進  
 扱よいそく経進磨乃明色代巻より経進といひ  
 けくあつた物あり小史よ毫燈中乃名ハ経進  
 名辟邪干紙よハ経進宋代宗慈り妹のくハ又  
 経進たぐ巻と進と勢同して文字あつた乃



何くそひ種一逆とままび理明らるるべし力  
計つらう代志家とまらるる

い月樹木と種一西日と本とゆり上付す

光古書一凡えり授と切く地挿と此月

一又花葉と種一色け月一布一

廣義よ見り一八三三の種とゆく種

生涯とら存るや花政全書よゆくと凡徳若木

と種一八下弦乃後上弦の葉す

八日と種一八月の種一葉あり一樹とて知一

氣盛たり樹木乃生涯全く枝葉よほり存る

樹木を種とやぶる種木とればも木とわつら

又つらく凡果木とゆりゆり子老九月乃中其後

樹れまつくと種一種とてまらるる

つらわくあ肥土と入水と浸へ一次年正月

うらうらゆ一種一樹の叶とて中へ種とて

土とつらわく一とよわつらなる土と加え

地色より二三可たらくとてまらるる

く垂るく次種一のら半月やとい毎の味一

此月柳乃種と切て地挿ハ速く種とて月を度

義よ凡えり凡此月枝と挿て可る木の枝



歌陽云 種花侍よ

淺深紅白宜未開。先後仍須汝。我欲何威  
種酒土。其意一日不花開

楊陳蘇り云 種花侍よ

二運初開是蔣卿。再開三運有剛明。誰有奄有  
云云 運一運花并一運云

趙云 載仁杏侍よ

白髮移根送遠途。何年及見子。垂老本根  
添培植。何屈花結子時

四月を教給代初あり。在よ本と云らる。云らる。云らる。

果てと云らる。云らる。云らる。云らる。云らる。

むすれらる。油ひきり。秋乃子とある。云らる。云らる。

以事。月念よ。及え。云らる。樹木。何依。云

會秋。以時。教。曾。弘。子。乃。日。秋。一。樹。教。一。歟。不。以。其

時。此。孝。也。云。れ。其。義。云。ら。る。本。と。云。ら。り。秋。と。云

云。不。け。と。云。ら。る。世。下。り。を。不。能。を。是。は。と。れ。ら。あ。と

天。地。乃。不。孝。云。り。と。云。ら。る。云。ら。る。

遠。全。録。よ。そ。く。對。鏡。乃。月。天。地。造。始。乃。也。何。也。云

亦。不。固。密。一。て。志。勤。と。云。ら。る。云。ら。る。云。ら。る。

此。月。狸。肉。と。云。ら。る。八。種。と。云。ら。る。葵。と。云。ら。る。八。種。と。云

生蕙とや人の面より遊風と雲の又梨とくく  
くまうれ又響聲不討れ地く  
乃動と遊く  
月令廣義 其書

凡一年の七中二候あり八月と一候と一候と一  
氣と一候と一月と一七中三候と一年と一  
四月より十月まで毎月各六候と云々と先  
四月の六候中一東風起凍才之聲 蟲始振才  
二魚上氷 右立雲乃三候あり才に 糝委魚才  
又鰯居小才云 本崩動たる氷乃三候あり  
元一日一在 漏刻乃較して百刻百刻ハ漏水の

肉より立より等ありと云々先乃較あり 湯湯は湯  
長に去るがいて 雲氷乃長短ひひ  
雲がくす時を較す  
一ノ一在 二十四刻 雲氷乃長短ひひ  
先より以下 毎刻 雲氷乃長短と云々  
先立雲ハ 二十四刻 又二十四刻 又十六刻  
十分合百刻あり 氷ハ 二十四刻 又十分  
氷ハ 二十四刻 十分あり 凡六十分と一刻は  
月令廣義





ちく片丸うらま奴婢と教ふるしん祿りくのあまあまのの持もちく  
 す又才さい辨べんのそのとあれあづらづらはは好こじじかかのの管かん家か  
 けで才さいありあり志しいいふふのの知ちええままれれななままいいたたくく修しゆ文ぶんを  
 るるそののとと持もちくく一一 臆おそ仙せんののいいくく買かひひ奴ぬ僕べは 毎まい才さいありありてて使し  
粗こ養やう有あるる休きう養やう者者 令れいんんよよかかれれひひららももけけいい多たくくのの好こ曲きよくををりりももああららしし  
 へへちちよよ後ごよよ上じやう等とうののるるままううへへちち考かうれれんんととつつやや  
 之之ももししままりり又又此ち石せきのの已いハハ幾いく奴ぬをを使しけけりり決けつ  
 下げ殿でんのの年ねん久く一一ををけけ之之ののううままりりすす才さいままりりとといいひひ  
 てていいひひここううりりたたどどりりててああららままらら多たくくいいままりりあありり  
 御ご領りやうとと一一年ねんとと定ぢやうめめもも一一のの人ひとおおぬぬをを去さ年ねんとと併へいしし

八日 釈迦しやくぢや佛ぶつのの生なれれ日ひありあり 佛ぶつ祖そ統とう紀きはは周しゆ比ひ昭しやう王わう二十  
 四年四月八日釈迦しやくぢや佛ぶつとありあり但た周しゆ比ひ昭しやう王わうのの月げつとといいひひ  
 西せい月げつとといいひひのの月げつはは今いまのの二に月げつはは尚なほままりり浮う屠と氏しがが  
 事こととと考かうごごしてして夏なつのの四し月げつとといいひひららゆゆりりののああららまま  
 りりありありとと古こ人にんのの後ごふふんんええりり  
 十五日 提だい要やう録ろくふふ今いま日ひとと世せ紀きののいいままりりのの中ちゆう中ちゆうくく  
 百ひやく九きゆう十じゆうのの所しよ分ぶんななれれははここのの世せにに過かすす事こととといいひひ  
 ころころありあり八月はちがつ中ちゆう又また秋あきのの氣き中ちゆうををままりり月げつ夕せき  
 とと号ごうししくく月げつとと貴きすすりりここううとといいひひ  
 ○佛ぶつ家かのの今いま日ひ釋しやく迦ぢや入に滅めつのの日ひとといいひひ涅槃ねはんををああらら

考れども至夏月建と考りやまけり梅もる小破邪  
徹と周れ穆王五十二年二月十五日佛涅槃す記  
せり月の二日は今廿二月ありあつる今十二月  
十五日とひく佛涅槃すす一

十八日孔子乃卒

孔子の生れ乃日後徳から  
これ孔子ち十代の終  
孔子の終り

二十九日 比艾蓋と田所は播一ぬ或は布一  
あへ一上己乃草履とるあをり手地何る人を  
農まも持ある一

臘日沐浴

暮の日夜の長さひく一は河のなりを臘あむ一  
あつる夜何あつる日此出るまで二多中と曉や一  
日今も昔まで二が半と昏とす昏曉今中時ハ  
長も属はくともる此明もあつる一登にぬれ  
これハ日夜ひく一は河とよとれ夜より日長一  
冬は一陽来復して漸湯雪生一日はながく  
ありく暮をよつる日夜ひく一をすあ  
ま分の日考姓先祖と考る一凡人や中あつる  
考姓先祖は神をまつる一考姓といふに母  
とて先祖ハ祖父母といふとて母のわく

けし一はた考妣とまづる強ふハ皆祖より下と  
 あり孫子の言祖より下とある一この言は  
 孫とけしすハも思とむくゆハ義あり父母祖  
 母我力の根本なり言ふくハ言孫よお記して  
 けしとくこれとあふを遠く追れん也此日一年  
 又日何り空射と日なり空射ハ冬仲夏  
 用ゆ一夏秋分秋分冬分なり春分二射  
 まつるも可なり是日ハ死日あり一年は只一日也  
 和俗これと祥月とハ毎月ハ月三と古語ハ何す  
 日本少く中比より考されハ此言も厚きに説く

素食とるハ可なり春秋乃為と馬り此言ハ何  
 一毎戒一平生食と後くくこくお約撰  
 と何一日本ハ考くもろくハ蓋蓋邊  
 豆ハ穀類と用ゆ一ハ只考妣祖生の目  
 たる物と用ゆ一又をろく一ハ考妣  
 食と用ゆれ日本少く今ハ魚名考ハ何  
 ことむくハ何國俗よ志くハ何室ハ何  
 古語よ志何人ハ父ハ家終と考用ハ何室  
 土俗とと斟酌してけし一古語よなつハ國俗  
 するむくハ魚一





幸よく万福と書けは又穀と書けは故に又まうまの穀  
 事れよらんうとめり神は此懸徳と稱すつと  
 ともこの日の立義乃後才又の成れとと書け  
 ち此れ後才又の成れりと神社十千の申成己主なり  
日と用つ 徳記を伸春撰元日命民社元日命民社と有り  
 風俗通よそく若ふれと情くよま書物とまれ  
 舟車乃りまうる足取れまのりしと後書徳すし  
 子まふか一有に記て社神と有り徳よそく若  
 氏子乃一旬純氏とよ平水土有記ていそ社  
張花郊持性小鷹山氏乃天下とたつ所の時ふれよと

農くゆふく百穀とよの夏代養るよふそ因乃  
 業継之有に記くゆ授さす共工氏の九列  
 覇乃所そのふと后とゆふく九列と平ぐ成  
 記てゆそ社とすしゆり意也のそく業百穀と極抄の  
ゆり うれ社と土社あり授ハ穀神あり土穀  
 の社とまうるも人氏と生るすり成りりそ  
 くとゆそ社日ある村民たがひよ東行て酒食  
 酸飽とゆそんえり張演の社乃有也と家と技  
 候醉人福と他より又い日れ酒と書と信  
 たよ酒尊酒とつづくと海程神事とふんつと













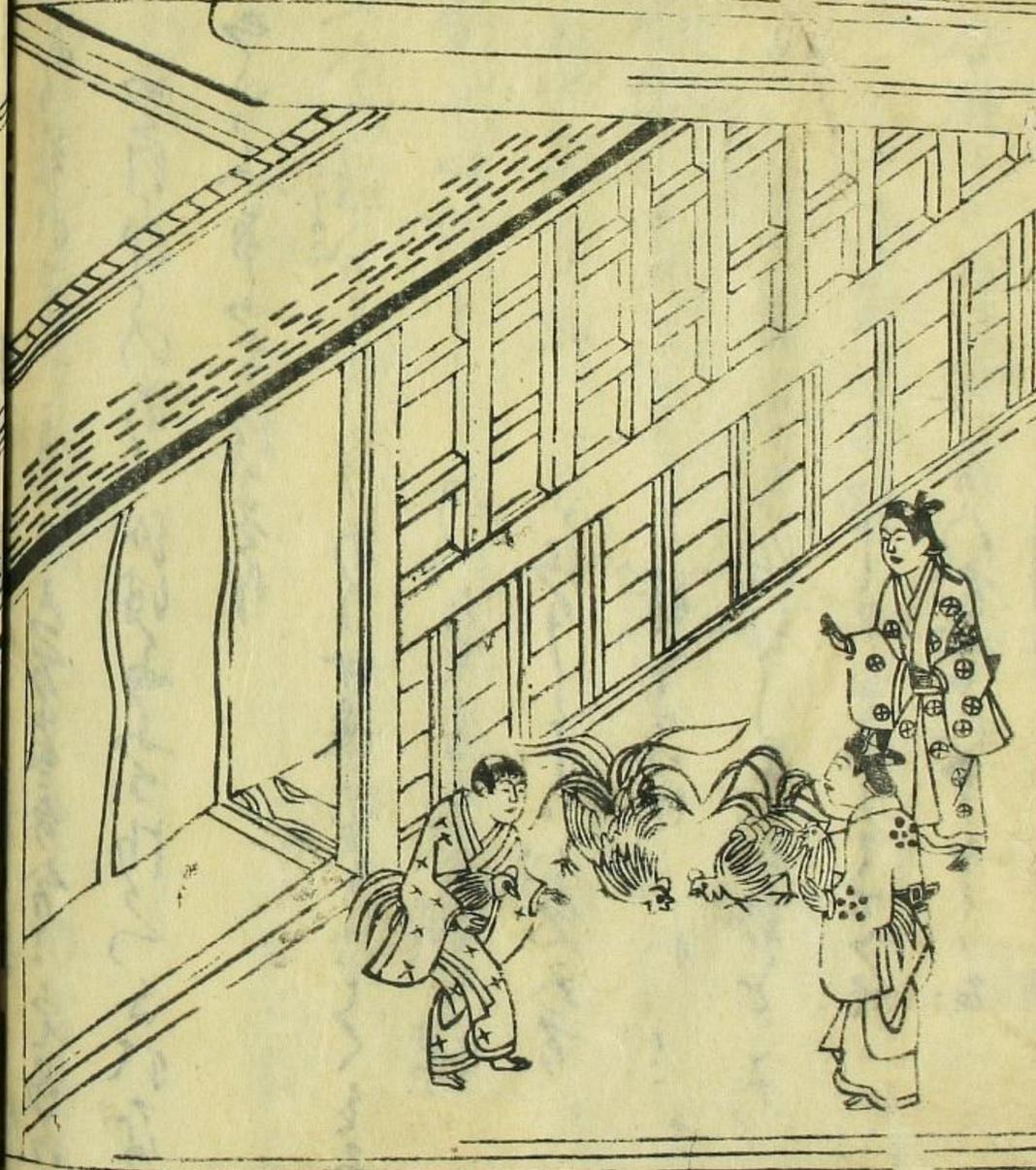
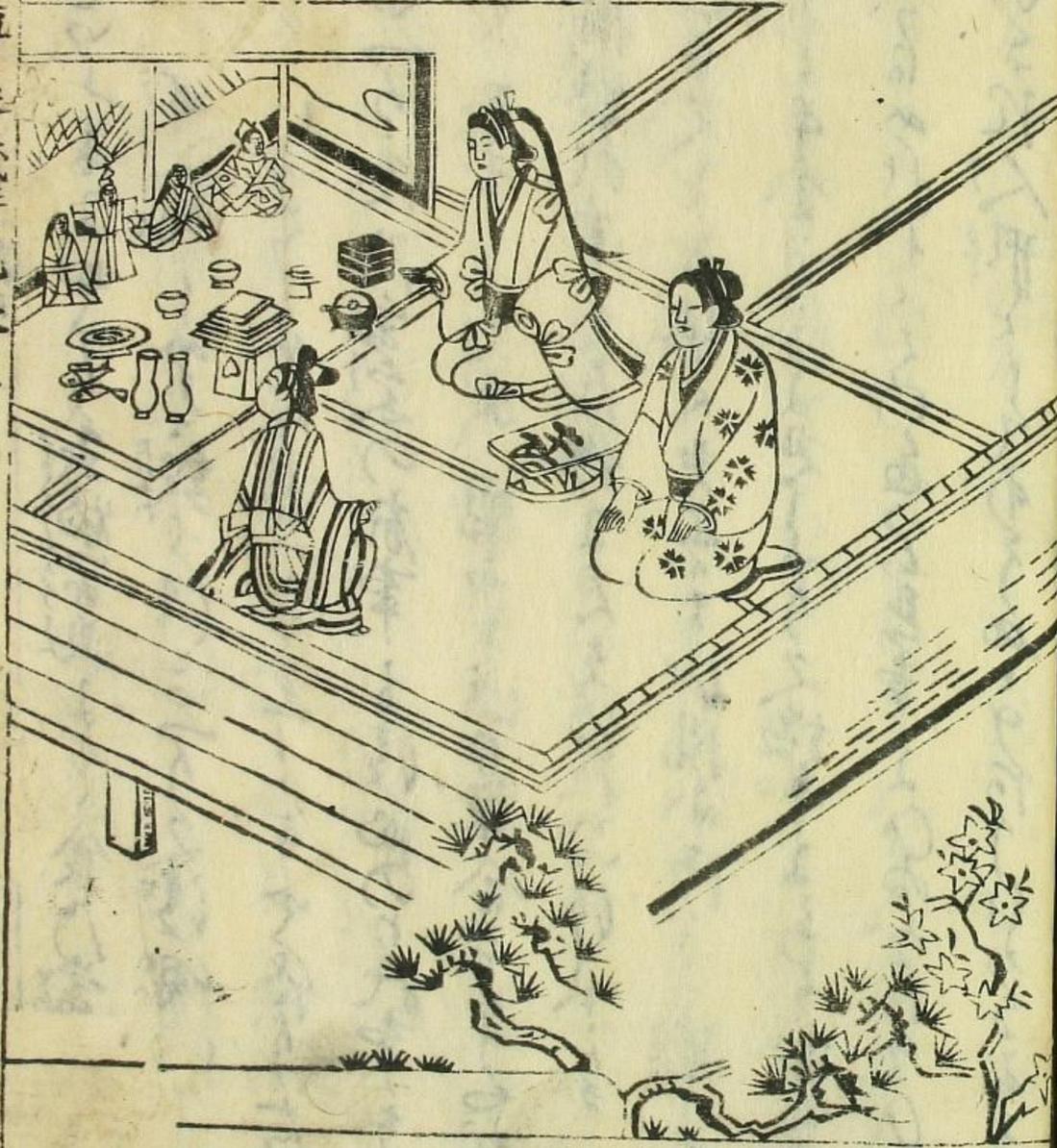
よのむ事月金座敷は法天とて引ておく二方地  
 花とておくはよひくこれとのめ病と除る能  
 ちうりおひちかん地を酒は浸さひひちかある花と  
 用へしちか乃花と服され鼻ぬけてやまひ  
 中言ふよかえり

○もろこゝへは信部よ考地先能乃津まは茶の付合  
 ととくむ方徳あり世國乃人とかれすはひちか事か  
 たり信部ふえりた外上巨級午早又中元を湯を  
 乃能たりこれ世俗の貴する世なりてよめくろは能地  
 時念もく考地先能乃津まは茶の付合

さゆいんまうろくようひ又産死よ事り事やま事り  
 りあく亡に事りておま事りてくもろ乃さ分ん  
 やあゆといを附代果蔬もの類也時食く上巳の  
 草徑當年乃標中元乃蓮花飯市湯の菊酒菓子  
 飯の類もろと盤まろりて盆祭は海ノ一二月  
 初は難産とてむり終れ  
 ○のめへは今日曲水乃宴とてたれも川乃上は遠  
 一被櫻志と流水は筋とくろた板の盆祭とて  
 さりたはよ精と能くくその格とて酒とてけく飲  
 らふ事ありぬ筋と能くたてらるは盆祭とて









この書よわたり玉燭宝典よ食乃常城平  
 各遊之關一々感之はより又清明代に結  
 とはくそく之てぬりものまじりてや侍りたりよ  
 とりて乃家氣の成事よ清のり代事きり  
 其の事よて我 國中をば日難合とるしむあま  
 關總代事よたは渡よ尺えゆれいけり下りま  
 ○は日艾と九統く戸よまけ風ふりし事よ用て  
 よし平金月会よ尺より又増年よまをもすあり  
 ○今日めわいとのぬら玉事よいぬかちそひえ  
 しりきた人形とてわくぬらりりむかちあまひの  
 事よ源氏物語をよも尺てゆれはあし一よりま

一よりより又源氏十よあまのぬら人いひかれ  
 ひひのまのそのとあま十よりうらりそい家  
 事よ一又遠よまも事人形よ衣振とぬら  
 て三世帯あまそ女よこれとてあまさるゆり  
 源氏よ尺てふあまふははるるる人  
 能くたつより抄よわまのハ三集よてこれとわの  
 時よこれよまも多し感よ乃うらつてわのゆりよ  
 晦日 海客 今日と三月共しよあまのまハ湯餅乃四  
 けして天字融りよ昔よ末結きよ事越同人の  
 無氣よ和暢とりのあまハ丸養遊一とて元くるる



言と毛教一々整美とみびくは又唐晉に  
 一禮と先之うす又浦とややくもたき人びく  
 先礼二及唐くは母依親戚男女と交じらふ事  
 と扱ぐ津梁を張む人情と通じ時宜と云ふ  
 政子美ふは已く候ふまゝくみんかすく平家  
 徳儀樂方と々ち介たりき

二月天季くはあし屋宅と云ふ地り改換  
 と修造一或茶屋と改換板屋と修葺と一  
 二月流石の石の石を石と田舎厩を記す  
 二月菜蔬花多よ菜菜もと種一或は菊苗三月

初又ハ中初うえアト一とやれハ何一と云り  
 南風蜀黍玉蜀黍著茨烏羊紅豆馬豆家豆菜豆  
 豆赤豆刀豆胡麻薑眉兒豆黍石竹地芝草麻子  
 荊芥香蒿をいひ月乃菜のくく免う免く一  
 紅豆々三月の中より初と種とト一又月の菜豆  
 ざりくくゆきいろれ菜のくく久一地草温子一  
 豆分一うゆ一丸菜蔬とゆりく一七記一  
 一とやれハあ一やま二文のく一唐字畫  
 かのあり又くの地氣ハ急暖にトトて運速のかり  
 久一又い月本と摘下一枕橋柑柿香梅乃影々

清明乃あ後二持てうしと月令度義一見たり  
 三月廿九日と九斗して所とらふや廿日ふかー三六のそく  
 かひう一度と法をそ又日に海に收まへー食より何  
 陽よりいーつうの茶月四或より考と用ひるを  
 新書乃後より玄垣淹れして筆一垣巖ハ乾巖  
 事されりい久となすの垣巖ハ甲やと干巖  
 野く去と信を用ひる一又巖ハ狗脊と垣淹れ  
 元 死のけりもいさ書乃後七中又日と期とまらふ  
 歎好の書一志いゆして今世終部乃ひいふあつ橋を  
 事なれ後と十日といふと登ハ部すす書ハ山年

たりとまをさ書乃後と中又日といく花候とす年  
 乃歎巖により山と山下にりまこ一連連  
 こと一あうたがりの書良系部乃ハ重橋をひく  
 橋工十日あまうかろー興とまらふ山の上ハ五  
 一花候とまらふと事一旬二旬或一月と  
 化和書ハ橋ハ法中よりと考く橋のうと橋は  
 是に和さハゆくちと考りたり  
 此月小蒜及雛みと食ふと次又禽獸乃又鷹と食  
 事なりれ生薤障麻肉と食ふと凍道とく  
 瘡毒熱病と食ハ並とくハ根と食す  
 月令度義一見  
 事なれ後と十日といふと登ハ部すす書ハ山年

強きくつらと殺しつらとて  
あゝあ命と延しむ百支のん  
五鼈と合く化せられ  
三月乃古候才一桐始  
見た清所の二候あり  
長根才六載勝降于桑  
清所ハ昼二十二刻十分  
至五十四刻十分夜四十分

あゝあ命と延しむ百支のん  
五鼈と合く化せられ  
三月乃古候才一桐始  
見た清所の二候あり  
長根才六載勝降于桑  
清所ハ昼二十二刻十分  
至五十四刻十分夜四十分

日六廿年庚申正月卷之二一畢

早稲田大学図書館

011888001613